

雜 錄

歸來 於戲錄

座

外

◎東湖嘗て叫んで曰く、大道滯晦非一日志士發憤要闡明と。吾人か今の世に於ける、宜しく此感慨此抱負なかるへからず『大陽』第八號所載吉村銀次郎氏か「國民の政治思想」を論する中左の如き一節あり

國家の秩序規律を維持するに國法のあるありと雖も、其力未だ個人の心靈界に存する道念を統轄するに足らず、去れば別に之を支配するの機關を要す、此機關こそ即ち宗教なり、宗教は能く個人の道念を誘掖感化せしめ兼て國法を扶け互に相待ち以て人の行意全般を統轄す、知るへし宗教の國家に至要なるを、蓋し民人の天賦自然に信仰心を有するの理により、宗教の勃興するも亦自然の理による、夫れ斯の如く宗教の發達は自然に基する世界を通して一なりと雖も、而かも異別ある所以は専ら其國土、風俗、人種、習慣等の違あるに出づ、西歐に西歐の宗教あり、東亞に東亞の宗教あり、就中我神國に神國の宗

教あり、而して復た宗教の力能く國體を維持するに足るものは、民人皆其國固有の宗教を崇信し思想を誘掖感化するに由る、反之民人異宗異教を奉せんか、其思想は腐敗紊亂し、國民的精神の美を望むも豈夫れ得べけんや、人あり説を爲して曰く、其國固有の宗教風紀頹敗探るべきなし、偶優美高尚のものあらは、之れを崇する何の不可あらむ、異宗異教の別何ぞ問ふを要せん、矧んや吾人は憲法上信仰の自由を有すと、善哉言哉、然りと雖も予輩は敢て論者に反問せん、曰く論者の言果して然らは何んが故に其風紀頹敗したる其國固有の宗教を挽回せざる、曰く國法禁せざれば能く何事をも爲して耻ぢざるか、白く異宗異教を奉して發達したる國民ありやと、要するに斯の如き論者は幽明正邪を辨別せざる奴輩のみ、本末輕重を知らざる蠢愚のみ、愛國の觀念なき呆子のみ、豈余輩の與みするものならむや、遂に予輩は斷言せん、國民の政治的思想即愛國の精神を養成せんには宗教の感化力を要し、宗教の力能く之れを奏せんには其國固有の宗教を奉せざるべからず、とこれ頗る吾人の意を得たるもの、今の世にして這般の

文字を見る、また大に人意を強ふす、泛々たる少才子、揚々たる外教徒、且らく心を虚ふして想へ、塵外嘗て一友の來つて基督教に入れるを告げ、宇内幾多の宗教界を通觀して已むことを得ず涙を揮つて基督教に入れりといふに答へ、予は一步を進めて望む、埋もれたる金玉を磨き、蔽ふたる雲霧を拂ひ、基督教を奉ずるが爲めに揮ふ一掬の涙を、轉して至高至大なる皇道を發揮するか爲めに灑かば如何、之れ則ち國民たるもの、義務にあらすや、と云へること、錄して客年の本誌にあり、今ま氏が此説を得て誦讀獨り竊かに悦ぶ。嗚呼、大道溼晦非一日志士發憤要闡明一

◎予か管長に隨行して韓山に遊び、京城に滞ること數旬、視察、觀風、及び運動の次第は、當時雁信に托して、以て本社に寄せぬ。中、「我國の所謂神道なるもの分れて多數派、而して其の主義精神は必らず大同にして少異なり、苟くも歩を海外に出し教を寰宇に擴むる、また内地に於けるか如き、布教の方法を以てするの太た得策に非ざるを想ふ、須らく化して一團となり勇往敢進せざる可からず、其の聯合する能はざるか如きは、些少の情實と從來の積弊との然らしむるものにして、太た道に忠ならざるもの、自から揣らざるもの

と云はざるを得ず。予は先づ鞏固なる神道聯合軍を組織し、以て能く計畫し、能く考量し、能く本末を察し、能く終始あらしめざるへからざるを信す、知らず内地の各神道家、果して能く國を思ひ道に忠に、この大同團結の實を擧げ、以て斯道を宇内に擴恢するの目的を達せしむるや否や、』と是れ予か年來の宿論にして則ち讀者に諒けたる所、而して未だ多く世間に此聲あるを聞かず。是れ言ふへくして行ふ可からざるの説なる乎、予か坐上の空論にして當事者か首肯する能はざる所のもの乎。

歸來匆匆、未だ廣く諸誌に見、諸家に聞く能はざるも、近時、佛教諸宗合同の説盛んなるか如し。是れ予か神道聯合説とは少しく其の所説を異にするか如しと雖も、眞言宗の從軍僧山縣某か、親しく遼東の山野を跋渉し、歸朝後其著『鐵如意』に於て其感想を記せるものあり、中に曰く

我は眞言なり、我は眞言宗なり、天台なり、臨濟なり、曹洞なり、日蓮なり、淨土なりと各宗四分五裂して一時に開教せば到底順民の精神を一統すること能はざるべし、故に吾人は豫て革新佛教を主張せし時機は今日に在り本尊に法事に僧制に悉く一定すへし云々

是れこそ誠に言ふへくして行ふへからざるの説ならさ

るか。予か神道の聯合説は其の依つて来る所以の原因を等ふるも、方法に就ては未だ斯の如き望むべからざる本尊一定説、宗制一定説にあらざるなり。果せる哉、反對の諸説囂然として四隅に起る、今其一を示さむ。

假りに各宗派互に數歩を譲り合ひ、各宗派の長處と長處とを採擇彙集し、總括攝合して一宗教を組織するとせんか、其本尊及び誦唱の經文の如き、如何か之を定むべき、或は眞言陀羅尼の咒文を誦し、題目を唱へ彌陀の前に座禪すべきか、恰も之れ鶴の如きものにして一種の怪物と何ぞ異ならむや、凡そ一宗教を組織し建設するには、必らず宗旨教義の一定せるものなくむばあらず、斯く論じ來れば、各宗派の統合一致は到底出來得べき事にあらざるなり、世の通佛敎論者動もすれば空想に耽て各宗派統一若は革新等と、跳逸客氣の輕躁議論を爲すは、豈に片腹痛き次第に非ずや。

是れ日蓮宗興門派の機關雜誌『法王』の所説なりとす、或は其の成らざるを辯し、或は之れが折衷を唱へ、或は之を冷評し去り、未だその何れに歸するやを知らず、然りと雖も佛敎家の熱心なる、其信ずる所の道に對つて努力する、遂に今後宗教界に如何なる現象を呈するや未だ知るべからざるなり、神道家たるもの亦た少しく留意戒心せざるべからず、

『鐵意如』の中又た左の如き言あり、

佛敎各宗各派ありて其説を異にし、其相を剛にする。故に萬人一心を本とする軍隊に過ぎざるなり、曰く眞宗の從軍僧が説教すれば眞言宗軍人の感情は面白からず、日蓮宗從軍僧が説教すれば眞言宗人は歡喜せず却て不平の原因となるのみ、故に今日の分裂せる各宗より、將來師團附の從軍僧を出願するも陸軍省に於て認可せず決して兵制中に編製すべからざるなり、若し從軍師の必用あらば神道即神官を以て之に充つべし、神道は日本固有の敎にして万人の平等に尊信する所の者なれば軍隊布敎に最も適すべし。故に佛敎家たる者此際に躊躇せば神道の爲に先んぜらるべし。然るに神官なる者は布敎に未熟なり、又神道は世界の各宗教と肩を比ふる處の教理なし。之に反して佛敎は高尚なり故に此時に於て日本の各宗各派を統一して新佛敎を組織して之を日本國敎とすべし、而して師團に旅團に聯隊に從軍師常隨布敎して可なり但し新佛敎組織は極めて難かるべし、故に今回の從軍師は歸國の上に従軍會を設置して新佛敎組織の基礎を造るべし。(百三十一、二頁)

嗚呼、讀者之を讀んで果して如何の感をかなす、今回の從軍僧か自から揣らざる事業の爲めに、僅かに吊祭の必要に應じ、云ふ可らざる苦しみの中に、徒勞の説敎傳道に努めたるを察すると同時に我か神道家の如何に之に感し、又た如何に今後の敎界に立たんとするやを聞かむと欲す、噫

